
六水語

聖魔光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

六水語

【Nコード】

N4283U

【作者名】

聖魔光闇

【あらすじ】

六水つて変人が、俺に話し掛けてきた。どうやら、秘密の言葉で、秘密の話をしたいのらしいんだが……。

(前書き)

まずは、『なんのこっちゃ』で構いません。

「今日から、二人で秘密の話をしよう。誰にもわからない、秘密の言葉を使って。まずは、言葉を覚えなさいといけないけどね」

そんな話を持ち掛けたのは、今まであまり話した事のない、クラスの中では物静かな、六水^{むすい}だった。

「秘密の言葉？ 秘密の話？」

何の事やら、わからなかったので、さすがに呆れた顔をしていたのだらう。

「こんな事を頼めるのは、森籐^{しんとう}君くらいなんだよ。他のみんなは、僕の事、変人だと思っているみたいだし」

「俺だって、お前の事は、変人だと思ってるよ！！」

喉元まできた言葉をグツと飲み込み、小さく頷いて、変人の提案に乗ってやる事にした。

何故って？ そんなの、面白そうに決まってんじゃん。変人六水の考えた、秘密の言葉を使った、秘密の話。周りの奴らの反応が、楽しみだ。

だからと言って、六水とだけ、話すつもりはねえけどな。

「じゃあよ。その秘密の言葉、教えるよ」

六水は、紙に書かれた文字表を、俺に渡してきた。

「じゃあ、森籐君。明日から、僕と話をする時は、その言葉を話してね。約束だよ」

それだけ言って、そそくさと帰っていった。

『秘密の言葉……ね。宿題もあるのに、面倒臭いな。しゃあねえ、やったるか！？』

紙を鞆に入れると、俺も学校を後にした。

「きれろし！」

次の日の朝、もうそれは始まっていた。

「お……じゃなくて、え〜とお、きし！ きれるし！ んみめ、せながらによ、めめゆるめよれ！！」

カンペを見ながら、ゆっくりと話す。

「やお、わかってがくがろ」

六水は、既に完璧だ。何も見ずに、会話をしている。当たり前か、コイツが考えた言葉だもんな。

『うおおおお！ いいって言っちゃまったけど、か・な・り、うぜえ！！』

「ばしのかよ？ せゆへ、へなべふに”は？”」

半自己嫌悪の状態の俺に、六水は楽しそうに話し掛けてくる。

「の”えこ、うかりしへに”せ！ やおうぢゆ、せらざるきり”ふちきるへて！！」

「しな。さへおか。うかと、のなばしるな」

それだけ言うと、俺は六水から離れ走っていた。後ろから、六水が何か言っていたけど、返事もせずに。

『やっぱり変人じゃねえかよ！！』

六水と、特に話しをしない授業時間が、こんなにも幸せな時間だったとは……。

友達と話すのにも、カンペを見なくていいし、言いたい事言えるし。

『でも、六水に、放課後までに、覚えておくって言ったからなあ……。ちよつとは、勉強しとくか……』

授業の合間やら、友達と話をしていない時間に、カンペをじっくり眺めながら、ため息をつきながら、覚えていった。

『くそお！ 国語も英語もわかんねえのに、語学が一教科増えちまつたじゃねえか！』

そして、恐怖の放課後は、やってきた。

六水に見付からないうちに、逃げて帰ろうかとも思ったが、何故

だがそれは、明日が嫌になりそうだったので、やめた。

「のなばしるな、きをへお！」

六水が六水語を話しながら、笑顔で走ってくる。

「ずをゆ、やなせゆめやべせるちね、めめよゆ」

半ば呆れて、そう言ったのだが、六水は嫌みに気付かないらしく、「やしれめへせめる。がめのせ、けわをよにはれよ、おなのあしのえせめへ！」と、かなり嬉しそうだ。

『まだ、練習なのね……』

「ばしのかよ？」

ちよつと考え事をする、六水は心配そうに顔を覗き込む。

「のえこ、えやしれ、へわわちめめる」

「ウノッ！　ろへおかう！　ウノッぢ、へなのえみらい！」

早速、カンペを堂々と見ながら、話しを始めた。

「んみめ。にお、めおかめ、せゆよめわべこらながる！？」

「やおれ、れのくれ、せめのやがる。うかやよしも、きのふちこそらと」

少し笑って六水は、目を背けた。

「せこ、れせのを、てめながそば……」

そう困ったように、六水に話し掛けると、六水は暫く考えてから、俺のカンペを裏返した。

「のえこ、えやしれ、へわほわせるちねれせいらろしゆ、おなのあしのろしへ？」

「練習つて、何すんだよ！？」

思わず、普通に話してしまった。

「がくがる。まをしゆめおかて……。やしがせう、えやしへよせうふほ、めおちわろしへ？」

六水も、マジで意味がわかんねえ。でも、その方が、まだ覚え易そうなので、提案に乗ることにした。

「のえこ、れのくれ、にるに」

いきなり言われても、全く何を言っているのかわからない。

困った顔をしていると、六水がカンペを見せて「にるに」がると、言ってきた。

「ああ、国語か」

「やし！ いめへ〜め！」

六水は、楽しそうに拍手をした。

「のゝえこ、をえゝがと。をえゝれ……、みしべる」

カンペを見ながら、「数学」と答えると、「うかうか、いめへ〜め！〜！」と、楽しそうにしている。

と、ここで気になっていた事を聞いてみた。

「せこ、によにはれゝ、ばしれをきなのかためめへさへてせめヒヲは、れをきなぢえせめにはれゝべこらながそば……」

「やおれ、ユアコナミがろ」

真剣に聞いたのだが、ニコツと笑うと、一刀両断された。

『「ニコアンスね……。奥が深いと言っか、曖昧だと言っか……』

「をえゝがろ。をえゝれと、へべるおちよれ、ばし？」

また、突然問題を出しやがった。

「ばよにはれゝ？」

「へべるがろ」

「へべる？」

「やし、へべる」

カンペを見ようとすると、カンペを裏返しにされた。

「何すんだよ！」

「へなかなせねながめがろ。におれ、へわせのぢ、はめちわち！」

何を言っているのかは、わからなかったが、とりあえず自分で何とかしろと、真剣に言われている気がした。

「……………へべるだよな」

「しな、へべるがろ」

「へべる。へべる。へべるだろ？ へべると、いう事は……。へべる。……………、わかった！ 化学だ！」

相槌を打つように、右手で左手を打ち付け答えた。

「がめいめへ〜め!!」

大喜びではしゃぐ六水を尻目に、ちょっとした疲れが溜まり始めていた。

「の、えこ、ににへてれ、もやおはんみ、へのるみらへて、へわほわちなめめる。だね、ケナハれせのと」

そう言つて、カンペを持たされた。

「やおの、えこ、れの、くらす。ににへてれ、えやしのをよ、せうふぢめにしへ」

「何つて？」

「がへて、えやしのをよ、せうふぢめにしおちめおかながる」

「は？」

「へわほわち。へわほわち」

六水が、顔の前でカンペをひらひらさせている。

『カンペ、見ろつて事か？』

「もう一度言つてくれ！」

カンペ片手に、六水にお願いすると、ちょっと考えてから、六水がさつきと、同じような事を言った。

「えやしのをよせうふがせ!？」

その言葉に、大きく頷くと、暫く間を置いてから、問題を言った。

「めもれ、なれの、くれ、り、るよがめみえせ、はのやのをがる」

ゆっくり話す六水の言葉を、カンペと照らし合わせながら、言った言葉を考える。

「図書室……か？」

「こおかぬー！」

嬉しそうな六水だったが、すぐに真顔に戻ると、次の問題を出した。

「ににれ、り、るよえてめせ、かめめるへな。がおち、へてがしにへみよ、のなばめながねな」

そう言えば、六水が体育の時に、何かしているのって、見た事がないな。

「体育館」

俺が速答すると、満面の笑みで、「つおみべう!!」と喜んでい

る。「をえゝべ、えやしよつめにゝよねながめがる」

真剣な面持ちで、そう言つと、六水は、しつかりカンペを見ると
いうように、俺の前に差し出した。

「えてめのゝえせめそば、みえせれゝのやぢね、せめへせう。もやしぬのゝおのあしのをがる」

長い！ 何処の部屋だ！

『長い名前の部屋……。カンペだ。カンペを見たら……。確か、もやしぬ……。のゝおのあしのを……。だったかな?』

「ちよ……。調理実習……。室?」

少し不安だったが、そう答えると、「みにゝめる！ がめいめへめがる!」と、とても嬉しそうにした。

「終わった……。のか?」

疲れた声で、六水に声を掛けると、「うん。終わりだよ。明日からは、普通に話が出来るといいね」と言われた。

『普通に話つて……。、やつぱ、テメエは変人だよ!』

そんな思いの中、俺はフラフラと立ち上がると、ゆっくりと教室を後にした。

「のなばしるな。うか、このかとゆ」

意味不明の六水の元気な声を聞きながら。

す || じ || し || ぎ || さ || ご || こ || げ || け || ぐ || く || ぎ || き || が || か || お || お || え || え || う || う || い || い || あ || あ ||
み || の || の || づ || つ || に || に || ぞ || そ || る || る || え || え || べ || へ || い || き || ゆ || ぶ || よ || し || つ || め || う || こ

六水語

(後書き)

ぷ ぶ ぶ び び び ぱ ぱ は の ね ぬ に な ど と で て つ づ つ ぢ ち だ た そ そ ぜ せ ず
ま ま ま け げ け れ れ れ よ と あ ゆ せ ど は ぢ ち お を を も も が か や や い い み

んをわろれるりらよよゆゆややもめむみまぼぼほぺべへ
なほさむおらぬてやろあたえひねくんわうりりりすずす

と、なります。
読めない文字は、六水も言っていました、
『二ユ
アンス』です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4283u/>

六水語

2011年6月29日03時25分発行